

■発行  
国立大学法人群馬大学  
男女共同参画推進室

〒371-8510  
群馬県前橋市荒牧町 4-2  
TEL:027-220-7146  
FAX:027-220-7143  
mail:kyodo-sankaku@jimu.gunma-u.ac.jp  
HP:http://kyodo-sankaku.gunma-u.ac.jp/

2015.6  
vol.7

## 群馬大学女性研究者研究活動支援事業（まゆだまプラン） FDセミナー 「女性の一層の活躍にむけて」開催

群馬大学は、2月23日女性研究者研究活動支援事業（まゆだまプラン）FDセミナー「女性の一層の活躍にむけて」を荒牧キャンパスで開催しました。本セミナーは、平成25年度から取り組んでいる「まゆだまプラン」の充実と教職員の意識の醸成を目的とし、管理的立場の教職員を対象として実施しました。

まず、本学の経営協議会委員であり、大学共同利用機関法人情報・システム研究機構理事の郷通子氏から「女性研究者の一層の活躍にむけて」と題して、お茶の水女子大学のご経験も交え、男女共同参画の視点を大学経営に取り入れ、女性研究者支援を推進する意義について講演がありました。

続いて、信州大学学長補佐、男女共同参画推進室長の松岡英子氏から「女性研究者研究活動支援事業を終えて～その成果と今後の課題」と題して、昨年女性研究者研究活動支援事業を終了した信州大学の事業継続の取組について、事例報告がありました。最後に、岩手大学副学長、男女共同参画推進室長の菅原悦子氏から「女性研究者研究活動支援事業【拠点型】の取組から」と題して、女性研究者研究活動支援事業終了後、さらなる発展に向けて、次に本学も目指すべき拠点型に取り組む大学の事例報告がありました。

本学は、女性研究者研究活動支援事業で、女性研究者の在籍比率の向上を目標にあげており、目標達成に向けて努力しています。本セミナーには、理事、学部長、室員等が出席し、今後の取組に向け実り多き研修となりました。



# まゆだま広場 設備ますます充実しています!

荒牧・昭和・桐生の各キャンパスにまゆだま広場が開設されて、早いもので1年が経ちました。このたび、新たにベビーベットを導入しました。お子様をお連れになつての来室の場合などに一時的にご利用いただけます。(※託児施設ではございませんので、お子様のお預かりはしておりません。)

また、広場に設置されている「まゆだまライブラリー」に新書が多数入りました。子育てや介護関連の書籍をはじめ、キャリア形成についての書籍や離乳食に関する料理本、妊婦向けのヨガの本など、多種多様な書籍を取り揃えております。是非お気軽にお立ち寄りください!



## 次世代育成支援対策推進法に基づく 国立大学法人群馬大学行動計画

教職員が仕事と子育てを両立させることができるための支援を行い、働きやすい環境をすることによって、全ての教職員がその能力を存分に発揮できるようにするため、次のような行動計画を策定する。

1 計画期間 平成27年4月1日から平成32年3月31日までの5年間

### 2 内容

#### 目標1 仕事と子育てや介護を両立するための職場環境の充実を図る。

《対策》平成27年度から男女共同参画推進室やまゆだま広場の更なる周知を行い、支援を充実させる。

#### 目標2 所定外労働の削減を図る

《対策》平成27年度から教職員に所定外労働の削減に資する研修を実施する。

#### 目標3 子育て中の人にやさしい職場環境の整備

《対策》平成27年度から乳幼児と一緒に利用できるトイレを3キャンパスに設置する。



## 男女共同参画推進室ホームページ リニューアルしました!

このたび、ホームページもリニューアルしました。トップ画面に「両立支援相談」や「研究活動支援」などのアイコンを新たに配置し、各ページにアクセスしやすくなりました。また、昨年冊子として配布した『群馬大学研究者ロールモデルブック』の一部を抜粋し、「ロールモデル」としてページを新たに設けました。随時当室に関するイベントやセミナーなどの情報を掲載していきます。どうぞご活用ください!

# まゆだまプランの集大成と今後に向けて

男女共同参画推進室長  
理工学府 教授 工藤 貴子



今年度から末松美知子前室長の後を引き継いで男女共同参画推進室長の大役を拝命しました。今年度は25年度から始まった女性研究者研究活動支援事業(まゆだまプラン)の最終年度です。群馬大学ではこの事業の採択を機に男女共同参画体制を促進させるための活動が本推進室を中心として活発に行われる様になりました。

これまでの本推進室の歩みを簡単にご紹介しましょう。末松室長のリーダーシップの下、推進室では3つのワーキンググループ(支援体制・環境整備WG、意識啓発WG、広報・ネットワーキングWG)が仕事を分担して様々な取り組みを行って来ました(図1参照)。その結果、図2にも有ります様に、大変多くの方々のご理解とご協力を頂く事が出来ました。特に、女性教員の割合が大学の中で最も低い理工学部で、女性教員の新規採用によりその人数が一気に倍増した事は外部からも高い評価を受けています。

一方で、取り組みの多くはこの様な目に見える成果としては表れにくく、その結実には更なる年月が必要である中、室員一同まゆだまプランの集大成となる今年度での目標の達成を目指してがんばっております。勿論まゆだまプランが終わっても大学での男女共同参画推進活動が終わるわけではなく、むしろ支援が終了した後に進んでいくかの見極めが大変重要であり、その事において推進室の真価が発揮されるものと考えております。引き続き皆様のご支援を賜ります様どうかよろしくお願い申し上げます。



図1



図2

## ～男女共同参画推進室 室員より～

# まず、自分から意識改革

広報・ネットワーキングWG  
理工学府 教授 山延 健



男女共同参画推進室の基本方針はいくつかありますが、その中で端的に数字として出てくるのが女性教員の割合です。理工学部は女性教員比率が男女共同参画推進室設置当時2%、現在4%です。見方によっては男女共同参画推進室ができたことで理工学部の女性教員が2倍になっています。しかし、依然、低い数値であることは間違いありません。単純に誰でもいいので採用して数字を増やすことはできますが、教育・研究の質を維持、もしくは向上させながら増やすことが必要です。そのためには環境整備が必要です。研究活動支援、育児休業の取得などの仕組みは、ある意味、作ることは簡単です。大変なのは利用する側、周りの人間の意識改革だと思います。現在はあまりひどくはありませんが、大学での教育研究活動は昼夜・休日問わず行うのが当たり前というようなイメージを持つ人もいます。それが本人だけであれば問題ありませんが、周りの人にまで求めると日常生活は破綻します。私も妻が同業者である関係で、子供が小さいときには休暇を取ったり、早退したりということをしました。幸い、上司は理解があったので嫌な思いはしませんでした。それでも、申し訳ないという思いがありました。そう思うこと自体が問題で、自分も意識改革をしなければなりません。ワークライフバランスの実現に少しでも協力できたらと思います。



# 和泉理事インタビュー ～男女共同参画を語る～

インタビューー **和泉 孝志** 男女共同参画推進委員長・理事（研究担当）・副学長  
インタビューアー **工藤 貴子** 男女共同参画推進室長・副学長  
**佐藤美由紀** 男女共同参画推進室員



## 女性研究者を取り巻く環境の変化

**工藤**：今日は新しく男女共同参画推進委員長になられた和泉先生にお話を伺います。先生からご覧になって、男女共同参画推進室の今までの取組で何か役に立ったり、波及効果があったと思われたことはありますか。

**和泉**：研究活動支援者の配置が挙げられますね。研究者の育児等ライフイベントにあわせて、研究支援をしてくれる学生、主に大学院生に労働の対価がRAのような感じで支払われます。研究をしながらそれに対する労働の対価を得ることができる、しかもそれが女性の育児などのライフイベントに貢献できるという、二重の意味でありがたい制度だと思っています。

**佐藤**：和泉先生は医学系研究科の基礎の研究室ですが、そこでの女性研究者に対する感想、ご自身の研究室の中での状況などを教えてください。



**和泉**：何より佐藤先生が素晴らしい研究をされておられるので尊敬しております。

昭和キャンパスには附属病院という大きな組織があって、保健学科と共に女性が活躍している職場なのですが、残念ながら私が所属している医学部の基礎系の教室には女性

教員があまりいないのが現状です。しかし、基礎の研究室配属とか、医学部で行っている MD-PhD コースでは、活躍する女性の比率が多いですね。生化学の教室にも MD-PhD コースの学生さんが来てくれます。今、医学部全体の女性の比率は 4 割弱ですが、MD-PhD コースの女性の割合は、私の印象では 4 割を超えているのではと思います。

**佐藤**：個人的には昔に比べると女性研究者が増えてきているという感覚があるのですが、先生はいかがですか。

**和泉**：昔というと、自分が学生の頃の 40 年前に比べると増えていると思います。生物学や分子生物学などの領域では増えていると思います。

## 育児も家事もイーブンに

**工藤**：和泉先生ご自身もご家庭で育児に関わっておられると伺いましたが、その辺りは。

**和泉**：そうですね、実は妻が小児科医です。私の意識では平等に負担したと思っていますが（笑）妻が現役でフルタイムで働くためには私だけでなく、妻の家族とか職場の方も含めて皆が支えないと難しい状況だったと思います。幸い妻は育児で小児科医としての自分のキャリアを中断することなく、産休明けからはフルタイムで働いていました。当時としては稀なケースと言えるのかもしれませんが。

**佐藤**：男性側が育児に参加するのも当たり前な雰囲気になって欲しいと凄く思うのですが。やはりパートナーのサポートがないと女性だけで育児を全部するのは無理なので。

**和泉**：そうですね。単に育児だけではなく家事全般を分担しないと。実際には妻の割合が多いとは思いますが、少なくとも意識の上ではイーブンに（笑）。例えば、料理を作るのは妻がやるけど片付けは私がやるとかです。お風呂掃除は私がするとか。

**工藤**：では、最後に推進委員長としての抱負をお聞かせ下さい。

**和泉**：女性の比率が幾つかの所で目標値として課されていますので、学長の指導の下、それを達成するような取組を進めていく必要があると思います。理想を言えば、あの比率はもっと高く設定したいのですが、現実的には現在働いている方がいますので難しいところもあります。まずは目標値と現状との比較を男女共同参画推進委員会や更にその上の役員会に私が定期的に報告するようにして、情報を共有するようにしたいですね。

**工藤・佐藤**：今日はお忙しい所ありがとうございました。

**和泉**：ありがとうございました。